

みんなで読もう！

長崎市民平和宣言 2006

「空気がなくては生きていけない。」「平和でなければ人間らしくは生きられない。」こんな根源的な訴えをせざるをえない時代がやってきました。今何もしないでいると決定的に取り返しのつかない時代に一挙に運ばれてしまいます。私たちの焦りを正直に言えば、「この国はもう戦争前夜だ」という表現がぴったりです。それは明日にも戦争を始めるという意味ではありません。「いつでも易々と戦争をする国」になってしまう、その動きが本流になっているという意味です。

私たちは、戦争前夜の兆候を自衛隊のイラク派兵、教育基本法改悪法案、共謀罪法案、憲法改悪国民投票法案などに見ます。

戦時下イラクへの自衛隊派兵は60年間の平和主義を一気に突き崩し、戦前・戦後の際立った違いを不安なものにしてしまいました。その上で「生き方を教える教育基本法」を「死に方を教える教育基本法」に変えようというのです。国の始める戦争や政策に反対する市民を「ただ話し合っただけで」捕まえてしまおうとする共謀罪新設、いとも簡単に憲法の改悪をやっけてしまおうとする国民投票法案、すべて憲法9条の改悪・「戦争をする国づくり」に繋がっています。秋の臨時国会は冒頭これら法案の強行採決から始まるかもしれません。

さらに国会の外では首相の靖国参拝が歴史修正主義をはびこらせ、また拉致・ミサイル発射を口実にした制裁・報復論が敵基地攻撃論にまで進化しようとしています。国民世論はナショナリズムと排外主義に包囲されています。加えて核戦争まで想定した国民保護計画が市町村のレベルで策定されつつあり、市民社会の底辺から丸ごと「戦争モード」に持って行かれようとしています。「戦争前夜はこうしてつくられていくのか」と異様に感心させられる政治状況が推移していると私たちは見えています。

今こそ60年間掲げてきた「ノーモア ナガサキ」の効果が発揮されなくてはなりません。ところがあの戦艦武蔵を建造した立神船台で、昨年36年ぶりに「海上自衛隊最強のイージス艦」「あたご」が進水したのです。長崎の兵器生産は戦前水準に近くなってきたのではないのでしょうか。

私たちは改めて「ノーモア ナガサキ」の意味を確認します。それは「もう誰にもこんな思いはさせたくない」から「長崎を最後の被爆地に」しなければならないということであり、また「やられたらやり返す」報復の断念を、そして永遠の「戦争の放棄」を意味していると考えます。「日本が戦争を始めなければ原爆投下はなかった」のですから、戦争を始めた日本の責任を自覚して、二度と過ちを繰り返すことがないように、核と戦争のない恒久的な平和を希求する姿勢を改めて強固なものにし、その立場から、到来した「戦争前夜」の時代と対峙しなければならぬと考えます。

以上、爆心地公園に集まった市民みんなの名において宣言します。

2006年8月9日 ピースウィーク市民集会

